平成 30 年度第１回名桜大学高大接続勉強会議事要旨
「名桜大学の初年次教育からみる教育改革の方向性」

1 日　時 平成 30 年 7 月 25 日（水）9:00～11:15
2 会　場 名桜大学学生会館 SAKURAUM5 階 研修室 B
（「教養演習Ⅰ」全学ポスター発表会の見学については同 6 階スカイホール）
3 出席者 高等学校６名（ 教頭、進路指導担当教員等）、 名桜大学７名（教育担当学長補佐、前リベラルアーツ機構長、副学長、教務部長、事務局長、入試係長、入試係主任）
4 プログラム
(1) 開会の挨拶　本日の勉強会の配付資料をもとに、高大接続勉強会の趣旨説明
(2) 出席者の自己紹介
(3)「教養演習」の講義運営状況について概要説明
(4)「教養演習Ⅰ」ポスター発表会の見学　　学生会館 SAKURAUM6 階 スカイホールへ出席者が移動
(5)「教養演習Ⅰ」ポスター発表会について意見交換

「教養演習Ⅰ」についての意見交換
①本校においても総合的な学習の時間を次期学習指導要領から探求型の学習に切り替えて行う予定である。現在、2 年生の 2 クラスで試験的に探究型の学習（質問を受けた場合に対応する形、基本的には見守る形での授業）を行っている。本日、見学させていただいた内容が探求型の学習を進めて行く上で非常に参考になった。また、「教養演習Ⅰ」ポスター発表会のテーマについては、自然や食べ物など似通った内容となっていた。ポスター表記の仕方や結論が異なっていた点は学生達の個性が出ていたと思う。このような取り組みは、学生のコミュニケーション能力の向上が期待できるプログラムであると考える。なお、ポスター発表会の会場で学生の様子を見ていると一部の学生についてはあまり関心がない状況に見受けられた点が少し残念であった。学生達の今後の成長に期待したい。
②学生一人ひとりが互いに協力しながら、探求した内容をポスターに取りまとめた形（学会等で行われているポスターセッションの形式）で発表会が行われていた点が非常に良かった。また、発表会自体が学生主体で行われていた点も素晴らしい。グループワークや発表会の運営を学生達が主体的に行うことで、学生一人ひとりのコミュニケーション能力や企画力の向上に繋がることが期待できる。なお、高等学校では生涯学習が探求型の学習へ移行する流れとなっているが、現状では探求や発表はせずに進路学習や行事の時間に充てられている。本日、見学させていただいたプログラムは、高等学校における探求型の学習を進めて行く上で非常に参考になった。今後もこのような発表会が継続的に実施されるのであれば、是非、地域の高校生が見学できる機会を作っていただきたい。
③本校ではインターンシップ終了後にパワーポイントで作成したプレゼンテーション資料をもとにインターンシップ報告会を行っている。インターンシップ報告会の懸案事項として、発表内容を取りまとめて行く上で高校生が情報として前例を欲しがること、報告会における発表内容が似通った形になってしまうこと、時間の制約があるため、教職員が準備をし過ぎる傾向にあること等が挙げられる。3 週間かけて準備を進めているポスター発表会に向けた貴学の学生の取り組む姿勢を高校生に見学させたい。本日の発表会の感想としては、グループ間に力の差があると感じた。具体的な事例としては、プレゼンテーションは上手だけどポスターの掲載内容がパッとしないこと、ポスターの掲載内容は素晴らしいけどポスターを見ながらプレゼンテーションを行っていたこと等が挙げられる。今後、学生達の相互の気付きの中で改善されていくことを期待したい。大学生が興味関心を抱くテーマかどうかによって集客にムラがある状況となっていた。素晴らしい内容でポスター発表を行っているにもかか

わらず、うまく集客ができていないグル ープについては集客の面で参加者を引き付ける工夫が必要であると感じた。

④大学時代に課題を設定し、設定した課題について調査を進めて行くことが、私自身とても苦手でとても苦労をした。貴学では 1 年次の段階からこのような取り組み（経験）をされていることを知り、非常に感銘を受けた。私自身の経験上、課題を設定することが一番難しいことであったので学生達も課題の設定に苦労したのではないか。課題を設定したうえで、アプローチの仕方を学び結論を導き出すトレーニングをしていくと自ずと論理的な思考に基づき結論を導き出す力（問題解決能力）が付くと考える。大学入学後間もない新入生全員が身近なテーマでポスター発表会を行った経験がこれから大学で 4 年間専門分野を学んで行く上で活かせていけるのではないかと考える。また、課題研究と称して授業時間の最後に総括する時間を取っている実業高校とは違い、本校では総合学習にあまり時間を割くことが出来ない状況に加え、教職員も貴学のように高いスキルやノウハウを持っているわけではない。高校現場における総合学習のあり方について、抜本的に改善をして行かなければ今後も企画倒れになると考える。

⑤実業高校である本校では課題を設定し、設定した課題について 1 年間かけて課題研究を行い、課題研究の結果を報告する形を取っている。高校現場における発表会を見ていると恥ずかしくて人前で発表をすることが苦手な生徒が多い状況となっている。段階を踏んで取り組まないと（場数を踏まないと）このような苦手意識は克服できないと考える。 本日のポスター発表会を見学し感想として、見せ方の工夫や表現力（プレゼンテーション能力）に差があるように見受けられた。実際に現地調査などをしてポスター発表に臨んでいるグループと現地調査をせずにインターネット検索のみでポスターの取りまとめを行い発表に臨んでいるグループがあるように見受けられた。中には人前に出るのが苦手で緊張しているように見受けられる学生達もいたが、是非、彼らには人が来ない状況の中で勇気を持って「自分達が作成したポスターを見て行ってください。」と声掛けができるようになってもらいたい。本日の発表会のような形で今後も学生達が人前で発表する機会を是非作っていただきたい。

⑥本校には普通科とフロンティア科があり、現在、フロンティア科において課題研究や発表を行っいる。これまで勤務してきた高校の理数科などでも課題研究やポスター発表、プレゼンテーション等を行ってきたが、主体的に課題設定や発表が出来ない生徒やグループが（やらされている感が）あった。本日のポスター発表会を見学した感想としては、全体的に非常に活があってとても良い雰囲気で発表が行われていた。実際に現地調査やポスター発表を経験した先輩学生が新入生を見守る形で発表会が行われていた点も素晴らしいと感じた。シラバスに記載されている成績評価の方法について、より具体的な表記にすれば（ルーブリックを採用する等、学生達から見て成績評価の方法がより可視化された形になれば）モチベーションが高まり、学生達の主体的な学びに繋がっていくと考える。

(6)名桜大学「教養演習Ⅰ」の紹介

毎年新入生 500 人を対象として、25 人～30 人の教員および約 100 人の 2 年次以上の先輩学生達が指導やサポートに当たる形で「教養演習Ⅰ」の講義が行われている。「教養演習Ⅰ」のノウハについて、他大学と比べて担当する教員や先輩学生達の引継ぎはある程度出来ていると感じるが、きちんとしたマニュアルがない点（制度化されていない点）が懸案事項となっている。

・「教養演習Ⅰ」の特徴は「学び方を学ぶ」こと。

ア．自分の学び方を理解する。（高校までの学び と 大学での学びの違い。） ･･･自己調整学習
自分の学び方のクセやスタイルを理解したうえで大学の中で自らの学びの場を作る。

イ．自らの学びの場を作る。（人から学ぶ、現場から学ぶ、本から学ぶ。） 教員から学ぶことよりも自ら学びの場を作ることが重要である。興味関心や疑問が湧いて来た時に相談や対話・確

認ができる友人、教員、現場、本など取捨選択できる学びの場を多く持つことにより、自分自身の知識や感覚を相対化することが出来る。（自分自身の 知識や感覚に自信が持てる。

ウ．学び方を工夫する。（意欲・理解の管理、PDCA、課題にあった学び方、実践に役立つ学び方であるか？）モチベーションをコントロールすることが非常に難しい。管理され過ぎるとモチベーションが下がる。意欲と自分自身がどの程度知識を持っているのか管理が出来るようになって欲しい。学びの PDCA サイクルを確立すること及び個人で学ぶこと以上に仲間やグループで学ぶことの重要性を出来るだけ早い時期に理解してもらいたい。何を目標に大学の 4 年間頑張るのか、いま実際に何を学ぶべきなのか、課題にあった学び方を選択できる力を付けて欲しい。社会に出た時に役に立つことなのかどうかの視点を持って学ぶことが出来るようになって欲しい。

・『教養演習Ⅰ』のテキスト

『大学生活ナビ（第 2 版）』、『大学生のためのリサーチリテラシー入門』、『教養演習サブテキスト 学び方をまなぶ』等を参考文献として講義が行われている。

・成績評価の方法について

ア．ゼミグループ活動への参画（コミットメント）・貢献度（30%）

イ．課題レポートの内容と取組状況（レジュメの作成・討議資料・まとめレポ ート）（40%）

ウ．発表会におけるプレゼンテーションの方法および内容（20%）

エ．ポー トフォリオの活用（提出期限・自己評価）（10%） 合計（100%）で行われている。

なお、『教養演習Ⅰ』以外に『教養演習Ⅱ』、『コンピュータ・リテラシー』、『アカデミックライティングⅠ』等が新入生全員を対象とした必修科目として開講されている。

・県内外のさまざまな地域から入学する学生にとって、本学での初年次教育『教養演習Ⅰ』のグループワークは良いカリキュラムの運用だと思う。学生達と対話をする中で学生一人ひとりの表情や笑顔から感性の豊かさを感じることができる。入学後、先輩・後輩コミュニティーを通して、意図的に学生達が交流する場を設定することにより、新入生歓迎会やさまざまな学生の人間関係づくりのシステムが機能している。他大学で懸案事項となっている大学入学後の人間関係づくりが上手く構築されていることを実感している。（『教養演習Ⅰ』の担当者ではない大学教員の感想）

(7) 高大接続について（まとめ）

社会が求める人材像や日本の社会構造の変化に伴い、既成概念に捉われないこれからの社会で活躍できる人材の育成を目指した教育改革が求められている。大学の数や学生数の増加に伴い大学進学率が上昇していく中で旧態依然とした教育方法では立ち行かない状況になっていると理解しているが、受験勉強も中途半端で学習習慣も身に付いていない高校 4 年生、5 年生のような学生が大学の中に入り込んできている感覚を受ける。私立大学の大半が定員割れの状態で願書を出せば合格する状況となっているが、本学においても得意科目と不得意科目がはっきりとしたバランスの悪い学生が入学してきている。本来であれば 5 教科 7 科目を受験した上で 7 割以上の得点基準をクリアした学生が入学する形が理想的であると考えているが、現実的に難しい状況となっている。入試で判定できることは一部なので、入試改革だけでは学生一人ひとりの成果を上げることは難しい（本質的な教育改革が求められている）状況にあると考える。